

野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編

『いま家族に何が起きているのか  
—家族社会学のパラダイム変換をめぐる—』

ミネルヴァ書房, 1996年刊, pp.365

本書の書名ともなっている「いま家族に何が起きているのか」は、現日本家族社会学会（1991年創設）の前身であった家族社会学セミナー以来の、長年の研究成果をまとめた家族社会学研究の到達点を示すものであると同時に、新しい家族社会学の地平を求めて模索しはじめた第一歩の書といえるであろう。

家族社会学の分野における研究蓄積の一つは、家族がマクロ、ミクロの両視点において常に変動し、変容しつつあるということを示すところにある。家族社会学における研究の流れは、それまでその主流にあった「家」研究から、高度経済成長期における「核家族」研究へと変化した。しかし、1980年代頃から様々な諸変化が家族に関して生起する中で、家族における「危機」「崩壊」あるいは「揺らぎ」といった言説がマスコミや知識人をはじめ、一般社会で繰り返されるようになる。このような家族をめぐる変化、また変化への言説を家族社会学はどのようにとらえていくべきか、という問題意識が共有されるようになり、1988-1990年にかけてのセミナーで研究・討論がおこなわれた。ここにおいて、高度経済期以降重要なパラダイムであった核家族モデルの限界が指摘されるとともに、新たなパラダイムへの転換の必要性が主張された。そして、前述のような現代の家族変動が危機であるか否かの現状認識に対して次のような内容の合意がなされた。(1)家族変化の方向は単線的でなく複線的である (2)主流からはずれる家族は逸脱でなく変体である (3)産業社会に最も適合的な性別分業に基づく核家族の使命は終焉しつつある。本書は上述のような家族パラダイムの転換地点における産物であり、そのことが副題としての—家族社会学のパラダイム変換をめぐる—にあらわされている。

本書の構成は、以下のようなIV部14章からなっている。

第I部「家族の個人化と私事化」(1.家族の私事化 2.農村家族における個人化家族規範の変容 3.夫婦関係の緊張と挑戦)、第II部「家族の多様化と諸側面」(1.主婦の就労と性別役割分業 2.高齢者世帯と家族・親族ネットワーク 3.親子関係研究の展開と課題 4.夫婦関係研究のレビューと課題)、第III部「家族変動と比較文化」(1.中国社会と家族変動 2.韓国社会と家族変動 3.イギリス社会と家族変動 4.スウェーデン社会と家族変動)、第IV部「21世紀の家族新時代に向けて」(1.家族新時代への胎動—家族社会学のパラダイム変換に向けて— 2.家族変動をとらえる視角 3.日本家族の現代的变化と家族変動の諸理論)

その内容は多岐にわたっており、ここで全てを評することは難しいがI～II章においては、それまで家族社会学が自明としてきた準拠枠あるいはパラダイムでは捉えきれない家族の事象・変化に注目し、それらを捉え得る新しい枠組み（概念）を提示・採用することによって、従来の家族における諸視点の再検討を個々の論文を通して試みている。また第III章では、日本の家族変動と比較する意味において中国、韓国、イギリス、スウェーデンの4カ国における家族変動（いま家族に何が起きているのか）についての4論文が掲載されている。第IV章はパラダイムの転換に関する総括的な論文が編者3人によって著されており、そこにおける合意、議論、問題点などを各々の視点から整理している。

最後に本書に対する評者の感想を述べるが、家族社会学の領域において核家族モデルが説明能力を失いつつあり、新しいパラダイムへの転換という地点までは足並みがそろったかにみえるが、そこから踏み出していく方向が家族の多様化と同様、様々に論じられ混沌としている感拭えない。刻々と変化しつつある社会の中で、個々の家族の事象・変化を探求すると同時に、それらの諸現象を全体関連的な繋がりの中に位置づけていく枠組を提示することこそ、家族社会学に課せられた新しい課題であろう。（新谷由里子）